

## 雲仙プロジェクト通信 10号

平成24年1月21日(土)・22日(日)

雲仙プロジェクト通信も、いよいよ2ケタの10号となりました。号を重ねる毎に、雲仙地域とのつながりが深まるような喜びを感じます。

今回は、はじめて地域の一般の方々との直接的な交流の場となった1月21・22日の「モニターセミナー」の顛末を報告します。活動の広がりに合わせて、当会からの参加者の年齢層も広がり、今回は妙齢のヤングレディ二人の参加もあって大変盛り上がり(?)しました。

## 1. 普賢岳を望む快晴の下、交流の輪が広がり、新たなエネルギーの発場が

今回は、セミナー準備に向けて少し早目の千々石到着を、と、いつもより30分繰り上げて福岡を出発するも、鳥栖JCT付近での事故渋滞に巻き込まれ、基山PAでの中川ファミリーとの合流後、法定スピードを少し(?)超過気味でレンタカーを転がして、千々石に到着したのは12時半近く。

会場の下峰公民館では、松本さん夫妻をはじめとする「雲仙の千の物語実行委員会」(少し長い名前なので、以後「雲千委」と、愛情を込めて呼ばせて頂きます。)の方々により、既に会場設営が終了していました。

昨年6月からのプロジェクトを通して「雨男」の汚名を冠せられ続けた筆者が参加したにも関わらず、何と今回に限って雲ひとつない快晴の天気となり、その影響か、千々石のまちの背後にそびえる普賢岳の雄姿の如き泰然とした笑顔で、松本さん夫妻が遅刻の我々を迎えてくれました。(少し噴煙を吐いていましたか?)

雲仙プロジェクトとして8回目を迎えた今回は、都市と農村の絆づくりとして、“いいね!♡雲仙♡よんなんせ”と題するモニターセミナーを開催することとなり、その初日の会場がここ下峰児童館。

会場が児童館だからというわけではないのですが、今回は中川夏希さんとその愛娘二人(こころちゃん5歳・ゆいちゃん3歳)が参加し、さらにいつもの顔ぶれである岑さん、山下さん、西尾さん、波木と、「国見の巻」に参加していただいた清角さんを加えての総勢8名の参加です。(2日目には東京から駆けつけた金尾さんも加わりました。)



松本さんの進行で開会

### ●まずは、当会参加者による雲仙巡りの感想報告から

13時からのセミナー開始に向けて続々と地元の方々も参集される中、これまでの活動でお世話になった方々の顔もちらほら散見されるも、大半は初めてお会いする方々ばかりで、会場は60余名の参加者で熱気むんむん。扇形にかつランダムに据えられた席の配置が、自由な雰囲気と楽しい出会いへの期待感を募ります。

いつもは“素”の装いでお会いしている松本由利さんが、今回はさすがにショートカットの髪型とドレッシーな装いでバッチリきめられ、進行役としていつも通りの軽快な語り口で開会を宣言。

松本正彦委員長から“マチと地域の交流の時間を楽しんでください”とのおあいさつに続いて、アドバイザーの久保圭樹さん(ネットビジネスエージェント代表取締役)の紹介があり、いよいよ当会参加者による事例報告としての地域巡りの活動紹介がスタート。

一人持ち時間5分の制限をモノともせず、瑞穂の巻(波木報告)、雲仙の巻(岑報告)、国見の巻(清角報告)、吾妻の巻(中川報告)及び愛野の巻と南串山の巻(山下報告)のバトンリレーで、かなり時

間超過しながらも、それぞれの語り口で「雲仙の素晴らしさ」を地元の方々に語りかけました。

なかには、ご当地の報告以前に筑紫野・太宰部での活動報告に熱が入ったメンバーもあり、思わず松本進行役から“雲仙のことも話してね！”とイエローカードを出される一場面も。（ご当人はそのことに気づいていなかったようです。）

また、プロジェクトを通して我々と一緒に活動された、諫早の秋元さんからも感想のコメントが報告されました。



清角さんの報告に聞き入る地元の方々

### ●地元参加者からも多くの意見が

事例発表に続いて、会場の参加者から自分達のまちについて話を伺うコーナーとなり、様々な思いを聞かせていただく中で、多くの方々から異口同音で“地域の良さの気付きが大事”と聞きました。

- 昔は地元が嫌いでした。マチの人の目が入って客観的に地域の良さを教えてもらい、今はもったいないことをしていた、というのが実感です。（国際化推進市民の会会長）
- 自然や歴史の宝庫で、良いところに住んでいると自負しています。私たちの話を聞いてくれる人がいることがうれしい。（千々石の住民）
- 国見町に住んでいますが、残念ながら他の町のことをあまり知りません。岩戸神社などは素晴らしいと思います。家族とまた行きたい。（国見の住民）
- 以前、日本にマイナスイメージを持っていましたが、外国で暮らしてみて日本のすごさ、島原半島のすごさがわかりました。（島原の住民）
- 南串山の国崎半島は素晴らしいところですよ。国家破綻して食料危機になったら、都会から田舎に疎開するのでしょうか。心配です。（有家の住民）
- 先週結婚して南島原に嫁ぎました。半島が一つになって、千のまちづくりが万のまちづくりになったら素晴らしいですね。（小浜温泉観光協会職員）
- 我々は地域の良さに対してマンネリ感を持っています。都市から見た雲仙の良さに気付くことが大事です。小田山集落の地域づくりに参加していますが、田舎を見て何故過疎になったのかを探ることが大事です。（小浜の住民）

など

### ●アドバイザーの久保さんからは、評価社会という切り口の紹介が

続いて、このような地域の良さを確かめる手段として、最近普及の著しいフェイスブック等のSNSの活用が重要であるという観点から、アドバイザーの久保さんから面白い紹介がありました。

それは、今回のセミナーの様子を、久保さんがフェイスブックを使ってリアルタイムで仲間に報告し、その反響をそのままセミナーの現場で紹介する試みです。我々の事例紹介が写真とあわせてフェイスブックで紹介され、早速多くの評価メールが帰って来ていたのです。



SNSの効力を語る久保さん

プロジェクトにより映像として紹介されたフェイスブックの画面に、会場の全員が驚きの表情で見入り、情報発信の速さとあわせてそれに対する評価を交えた反応の多さに会場がどよめきました。

さらに、SNSが大きな社会変革のうねりとなった「2011 エジプト革命」の立役者であるワエルゴエム氏の講演の様子（ユーチューブ）が紹介されました。その内容は、我々はじめ地元の方々にも

少し難解なところもありましたが、SNSが今や世界の政治局面を左右するほどのパワーを有するという事実（「評価社会」というキーワード）は、多くの参加者に印象深く受け入れられたようです。

### ●副市長のサプライズスピーチに続いて、地元産のお菓子を囲んで茶話会を。

最後に、サプライズゲストとして雲仙市の町田副市長が紹介され、松本さん達の活動に対する激励と、セミナーの盛会を称賛する暖かいスピーチをいただきました。（本当はサプライズのはずが、当会の某会員が事例紹介で思わず口をすべらしてしまい、松本さん大いに苦笑い。）

会場脇のテーブルには、ずらっと雲仙市内各町特産のお菓子の箱が並べられていましたが、これらを試食しながらお茶をいただく「茶話会タイム」が15時から始まり、会場はそれまでの少し緊張した雰囲気から、一気に和やかな歓談の場へと変わりました。



会話がはずむ茶話会の様子

当会からの参加者も、これまでの活動で知り合った馬場さん（翌日のNHK全国放送で“こぶ高菜”と一緒に出演）、中川さん（瑞穂町の瑞穂さん）、大町さん（島原四郎会のイケ面青年）、竹下さんご夫妻（天洋丸の素敵なお夫婦）、川尻さん（千々石の語り部）などの顔を見つけ、大いに旧交を温めさせていただきました。（長田製茶の長田さんが所用のため遅れて駆けつけられ、日本茶インストラクターによる直々のお茶は残念ながら間に合いませんでした。）

また、清角さんが早速「思い出ナビ」のデモを開始し、地元の方々も興味深くセピア色の画面に入っていました。

そろそろ陽が傾き始めた16時にセミナーの終了が告げられ、地元の方々の歓談の余韻と、セミナーの成功に対する雲千委の方々の興奮を感じながら、我々も上峰児童館を後にしました。

過去7回の活動で雲仙の素晴らしさを実感しながらも、本来期待していた地元の方々との交流が少ないことに物足りなさを感じつつあった当会のメンバーも、今回は一気に多くの方々との知己を得、さらにその方々の前向きな姿勢をみさせていただき、これからの活動に楽しい予感を覚えた次第です。

## 2. 白濁の温泉につかり、湖畔の宿で一足早い節分を・・・

### ●小地獄温泉と橘湾の夕陽に、1日の疲れも抜けて・・・

21日の宿は当初、南串山の松尾農園の再訪を予定していましたが、諸般の事情で雲仙温泉に変更となり、松本さんの手配で民宿「関荘」を紹介していただきました。（松尾さん、又の機会にはよろしく願います。）

当然のことながらこの民宿にも温泉があるのですが、これまでの活動で数々の温泉を体験した一行を満足させ、かつ初日の労をねぎらおうとする松本さんの嬉しいご配慮で、我々は先ず雲仙小地獄温泉に向かいました。この小地獄温泉に向かう途上でみた橘湾の夕景は、これまで眺めた雲仙の夕景の中でも最高と言ってよいほどの素晴らしいものでした。（「雨男」にも、たまにはご褒美が）

雲仙温泉街の国道から少し山あいになり下りた谷筋に、八角形のログハウス風湯屋が2つ並び独特な形の小地獄温泉館があり、一行は早速、少し硫黄臭のする白濁の湯に入浴。源泉掛け流しの贅沢な硫黄泉は適度の熱さで心地よく、ゆったりとした気分で初日の疲れをすっかり落とすことが出来ました。

雲仙市の豊かさ、素晴らしさのひとつに、このような温泉が暮らしの場のごく近くたくさん分布していることがあるな、と改めて再確認した次第です。



### ●湖畔の宿「関荘」は貸し切り状態で、鬼退治の豆と涙が入り乱れ・・・

雲仙温泉街の北側に「鶯鶯（おしどり）ノ池」というため池があります。三方を山に囲まれ綺麗な水をたたえたこの池の湖畔にある民宿「関荘」が、この日の宿です。1月のオフ期とあって、その日の泊り客は我々の一行（当会参加者と久保さん、秋元さん）だけ、全くの貸し切り状態でした。

ビールでのどを潤し、宿自慢の地元食材をふんだんに使った夕食を堪能した一行は、ヤングレディ達（中川家の姉妹2人）が途中のスーパーで見つけた節分豆と鬼の面を使って、早速、豆まき大会の開催。（貸し切り状態ならではの狼藉で、宿のおかみさん達には本当にご迷惑をおかけしました。）

「関荘」の看板娘りんちゃん（6歳）と意気投合した姉妹は三人で、鬼の面をかぶった大人達を勇ましく豆で退治する、はずだったのですが、妹のゆいちゃんが、何故か「福の面」をかぶったYさんに極度におびえ、“ごめんなさい、ごめんなさい”と大号泣！中川母さんも、“ゆいの口から初めて「ごめんなさい」という言葉を聞いた”と、あきれ顔。周りの大人たちも、“Yさんは、お面を取った方がよほど怖いのに、ねえ”とこれまたあきれ顔。子供たちの思いのほかの反応に、ひとりおろおろするYさんではありましたが。



号泣のゆいちゃん



福面の鬼？

翌朝、朝湯と朝食で前夜の酔いも抜けた一行は、宿のおかみさんを交えて玄関前に揃い記念撮影を、とふと2階を見上げると、窓脇の外付けエアコン機の上に宿に内緒で持ち込んだ缶ビール6本が並んでいるのを発見。（気温の下がった室外で冷やしたまま、忘れてしまったもの。）“しまった”というみんなの顔を横目にして、“あ、忘れ物！取ってきましょう。”と急いで2階にかけあがるおかみさんに、一同恐縮至極。夜は騒々しく騒ぎ、勝手に飲み物・食べ物の持ち込みまでしても、にこやかに対応していただいた「関荘」のおかみさん、本当にお世話になりました。（ちなみに、残ったビールは竹添ハウスに寄贈。松本さん、いわくつきのビールです。心して飲んでください。）

宿のおかみさんとりんちゃんに送られて、一行は県道を一気に千々石まで降りましたが、下り坂の途中で眺めた岳の棚田や橘湾のパノラマ景は、息を飲むほどのダイナミックな風景でした。

### 3. JA千々石マダムスによるクッキングスクールで、郷土料理に挑戦。

一行は、約束の9時丁度に、竹添ハウス裏の国道沿いにあるJA島原雲仙千々石支店に到着。今日も遅刻するのではとやきもきしていた松本夫妻が、やっと着いたねと、少し口元をひきつらせた笑顔でお出迎え。（ちなみに、当日の天気は曇りで昼前には霧雨も。「雨男」の面目躍如？）

#### ●JAマダムスは、やさしくてしっかり者の奥さま達

2階建てがっちりとした建物の千々石支店の2階に上がると、JA女性部千々石地区（通称、JAマダムス）の皆さん10名と、地元の奥さん達3名の総勢13名がお待ちかねでした。

早速、松本さんのリードで互いの自己紹介を行い、昼までのスケジュールを確認。

マダムスの皆さんからは、一人一人のお名前と住んでいる場



JA千々石マダムスの皆さん

所の紹介は勿論として、作っている作物や取り組んでいる活動について紹介があり、米、ミカン、野菜類だけでなく、ブルーベリーの栽培や、ゴキブリ饅頭（ゴキブリをいただくのではなく、ゴキブリにいただいていただくための饅頭です。勿論、駆除用。）の製造、さらに農作業用の帽子等の裁縫等と、多様な取り組みをされていることをお聞きしました。

### ●「いぶくろ」で材料を仕込み、協働で郷土料理に挑戦！

本日取り組む料理は、「六兵衛」と「じゃがいものだご汁」。だご汁とは、だんごの汁ものと理解するものの、「六兵衛」は何?? 人の名前??

大きな疑問符を頭に浮かべながら、当会メンバーは、マダムスとともに料理材料の買い出しのために、JA横にあるセブンイレブンへ。と言っても、我々が出向いたのは、コンビニに併設された農産物直売所で、その名も「いぶくろ」。セブンイレブンに併設された直売所は全国的にも珍しいらしく、店内は、時間がくればシャッターで仕切られる構造となっていました。

では、何故「いぶくろ」か? マダムスの皆さんの説明では、島原半島全体のかたちが胃袋の形に似ていることから命名したとのこと。「それでは、千々石は十二指腸あたりですか。」と返して皆さんの笑いを取ったのは筆者ですが、よくよく考えてみると十二指腸ではなく食道側の噴門部というのが正解か、と後になって反省。

「いぶくろ」で、じゃがいも、さつまいもを始めとする根菜類やその他の野菜などをたっぷり買い込んで、再度JA 2階に戻った一行は、マダムスの皆さんの手ほどきを受けながら調理に挑戦。

日頃、料理とは縁遠い当会メンバーも、マダムスの笑顔と時々のつつこみにほだされながら、果敢に、料理に（と言っても材料の皮むきや乱切り等が主ですが）取り組みました。

中川姉妹はさすがに女の子、日頃おままごとで鍛えた腕の見せ所と、姉のころちゃんはおちこちの料理現場に顔を出し大人に交じって大張りきり。妹のゆいちゃんも、初めての庖丁使いで人参の輪切りに挑戦し、大いに満足の様子でした。

じゃがいもの団子を手分けして作り、大きな鍋に他の野菜とともに味噌仕立てで煮込んで「じゃがいものだご汁」ができあがり、本日のメインディッシュのひとつがこれで判明しました。

一方、もうひとつの「六兵衛は?」、と眺めると、マダムス達が大きなボールに薄茶色の粉を入れて少しずつ水と捏ねている様子。この粉はさつまいもの粉で、捏ね上がった状態で茶色の野球ボール大の団子にします。ここからが技術のいる作業となり、大きな鍋にたっぷりと湯をわかし、その鍋の縁に、多くの小さな穴のあいた羽子板状の大きな板をかけ、さつまいもの団子をその



「いぶくろ」での食材選び



だご汁に入れる団子の仕込み



さつまいも粉を捏ねる



さつまいも粉の団子を手押しで、麺に



板に押しつけていくと、板の穴から麺状となったさつまいもがそのまま鍋の湯に落ち込み、まるでソバ麺のような麺がゆで上がります。この麺を醤油味でいただくのが、何と「六兵衛」の正体でした。

この麺をつくる工程がなかなか難しく、マダムスの中でもこの作業の得意な方がもっぱら麺づくりを担当されていました。我々にもやってみろとのことで、秋元さんと筆者が麺作りに挑戦。日頃から料理自慢の秋元さんはさすがに手際よく麺を作っていました。恐る恐る取り組む筆者のやり方ではなかなか麺ができあがらず、さっさと交代させられた次第。この製麺技術の難しさを、体験できただけでもよしとしましょう。（一人だけで納得。）

### ●最後は、みなさんの胃袋を満たして

あれこれと取り組むうちに、いつのまにか時計も 12 時を打ち、いよいよ出来上がった料理をいただく時間が到来。20 人がいっしょにいただくためにと並べたテーブルには、マダムスの皆さんが持参されたつけものやトマト、こんにゃく、ブロッコリーに加えて、高菜を巻いたおにぎりなどがずらっと並び、メインディッシュの「だご汁」と「六兵衛」が一人一人に配られて、本当に贅沢な千々石郷土料理御膳が揃いました。

味付けや配膳等のほとんどはマダムスの方々が担当されたものの、少しでも手伝ったぞという満足感で当会メンバーもテーブルに付き、千々石の美味を堪能しました。

貝だくさんの「だご汁」は団子のもちもち感が楽しく、また見た目は茹でたソバかと思間違う「さつまいもの六兵衛」に舌鼓を打った次第です。

食後の歓談は、マダムスと当会メンバー達との交歓の場となりましたが、沖縄出身の秋元さんの周りに多くのマダムスが集まり、沖縄話に花を咲かせていました。皆さんが沖縄にはいろいろとご興味をお持ちの様子で、なかには“孫娘を秋元さんに”と目論んだ方も一人か二人はおられるかも？

秋元さん、期待しましょう！



J A の課長さんも加わって



六兵衛（左）とだご汁（右）

## 4. 雲仙プロジェクトも、やっとスタートラインに

昼食と歓談の至福の時間の後、参加者一同で一斉に片づけをして、J A マダムスの皆さんによるクッキングスクールは幕を閉じました。

松本さんからは、次回の会議を 2/18・19 に竹添ハウスで行うことが予告され、また来期以降の島原や千々石での活動に向けた取り組み姿勢を聞かせていただきました。

一昨年秋にはじめて雲仙を訪れ、巧みな松本さんのリードに乗って雲仙地域の魅力にのめり込んできたこの 1 年間と半年でしたが、思えば今回初めて地域の方々との率直な交流を体験できました。返して言えば、地元の方々との交流の機会を得るために、1 年半を費やしたということです。

そこには、既に 8 年余りを地元の方々との接点探しに費やしてこられた松本さんの、深謀遠慮の準備があり、我々が突然入り込んだだけでは到底達成できない地道な取り組みがあってこそその到達点だと、痛感します。

我々共助研の活動は、都市側に住む我々と地域で暮らしを営まれる方々とは、対等に互いの価値を認め合い共助の絆を確かめ合うことではじめて成り立つ活動であり、そこにはかなり質の高い信頼感が求められます。

したがって、地域に入る際の我々の活動は、決して一方的な思い入れだけでは成り立たず、常に地域の方々の我々に対する反応や姿勢を確認しながらの、時間をかけた作業を必要とします。

その意味で、今回のセミナーにおける皆さんと我々との交流は、まさにスタートラインに立って第一歩を踏み出した段階であり、これからが本番です。

そのような思いを持って振り返ってみると、今回お会いした方々の瞳には、しっかりと先を見据えた視線と、我々を受け入れても良いかなと感じさせる微笑みが、少しばかりは浮かんでいたように思いました。そして、長崎や諫早と一定の距離を保ちつつ、半島の辺境性を逆手にとって頑張ろうとするしたたかさが垣間見えます。

そんな地元の皆さんが、地域を守っていくために本当に困っていること、そしてその解決のために描こうとされている少し先の雲仙の姿について、これからも松本さんのリードを受けながら、いっしょに話し合える機会を作っていければ素晴らしいな、という楽しい夢に浸りながら福岡への帰途につきました。

(文責：波木)



民宿「関荘」玄関で集合写真（右端がおかみさんとりんちゃん）